

真っ黒な、絵でした。

真っ黒に塗られた絵。ぽつりと真ん中に、赤のような、青のような、丸があるだけの。

「お母さんの子宮、なんですって」

NGO 職員であるその女性は、愛おしそうに、苦しそうに微笑みながら、私にその絵を手渡しました。

『僕は0歳になりたいんだ。そしたら、お母さんのお腹の中で、お母さんとずっと一緒にいられるでしょ？』って、その絵を描いた男の子は言うんです。自分のなりたいたいものをもって、描かせた絵だったんですよ」

彼女は、ボスニアで難民の支援活動を行っていた時に、その男の子に出会ったのだと言います。

「彼は、目の前で母親を殺されたんです」

難民。そう聞いて、皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。

擦り切れたテントのような、住居の集まり。

濁った水しか出ない、共用の水道。

猜疑心に溢れる目をした、幼子たち。

彼らは、ただ生きたい、そう願っても叶えられない。ただ学びたい、そう考えることすら、出来ていません。そこにあるのは、ただ先が見えないことへの「絶望」、それなのです。そして、このような状況は、いつ、どこでも起こりうることです。

更に、難民の中には、国際社会からの支援すら受けられない難民が、存在しています。彼らこそが、国内で難民化した人々、つまり、国内避難民です。彼らは、自国の政府からも庇護されず、国際社会からも支援されることがない、正に人権保護活動の空白にいる被害者です。

冒頭の、あの真っ黒な絵。

私は、あの絵を前にして、何も言えませんでした。まるで自分が、真っ暗闇の、その黒の中に吸い込まれていく、そんな気分でした。

私はその時、確かに、たった9歳の男の子の絵の中に、底知れぬ「絶望」を見たのです。

国内避難民の数は現在、世界全体で、3000万人にも上ります。発生国の多くは、中東や、北アフリカです。その数は減るどころか、ここ数年の間にも大幅に増え続けています。

そして彼らは、劣悪な環境下で暮らしています。十分に生きられるだけの物資もなく、彼らは、「絶望」の中にいるのです。

例えば、衛生状態の問題。国内避難民のキャンプでは、3割以下の人々しか綺麗な水を手に入れることが出来ません。あるいは、食糧。これもまた、3割程度の人々にしか行き届いていません。

また、基礎教育に関しても、同様のことが言えます。約9割の国内避難民の子供たちが教育を望んでいるにもかかわらず、実際には3割ほどの子供しか基礎教育を受けられていません。読み書きを覚えるよりも、子供たちは働かなければならない。家事をするだけで一日が終わる。そんな子供も、キャンプでは決して少なくはないのです。

では、彼らはなぜこのような状況下であり続けているのか。その原因は2点あります。

1点目は、国内避難民支援に必要とされる**資金**の不足。

2点目は、国連組織を主体とした支援の困難さ。

まず、1点目の、国内避難民支援に必要とされる**資金の不足**について。

国内避難民支援に関して、**最も重要であり、最も不足しているのは、支援活動を行うための資金**です。現在、国内避難民には、彼らの地位を確定する条約がありません。明確な定義を持たず、支援の範囲を定めることが出来ないために、支援の必要性の理解が薄く、資金が集まりにくいのです。実際、国内避難民の支援における資金不足は、国連機関が算出しただけでも1500億円を超えるものです。難民支援活動への国際社会からの支援金や寄付金の一部を取り入れるだけでは、追いつかない状況まで来ているのです。

そして2点目の、国連組織を主体とした支援の困難さについて。

国連の国内避難民支援に関してまず問題であるのが、縦割り行政による調整活動の難しさです。

彼らの支援活動に関して国連は、各機関に対し、それぞれ役割を担うよう呼び掛けています。しかし、国連の機関は、それぞれの**独自性**を重視する傾向にあります。だからこそ、**専門機関が存在しない**国内避難民の支援は、国連内で調整が**困難**なため、充足しないのです。それは国連開発計画の公式見解でも、述べられています。食糧支援の際、他の支援物資が確保されていなかったために、彼らの行った食糧支援が、**そもそも無意味**になってしまったのです。

また、国連、という看板**そのもの**が、時として現地で脅威となる可能性もあります。事実、ボスニアでは、人道支援活動をしていた国連職員に対して、頻繁に襲撃が行われました。その危険性も鑑み、国連の支援活動が**阻害される**場合もあるのです。

このように、国連の支援活動は、国内避難民への支援を十分に行うことが出来ない状況なのです。

これらを踏まえ、私の政策は2点。

1点目は、条約の制定による国内避難民の支援資金の拡充。

2点目は、NGO団体を実行主体とした、支援体制の確立。

まず、1点目の、条約の制定による国内避難民の支援資金の拡充について。

この条約でまず定めるのは、国内避難民の定義と、彼らに対してどのような権利を認めるか、ということです。これらを定めることで、国内避難民の支援に関しての範囲を確定することが出来ます。また、彼らの支援に関しての必要性の認識を促すことにも繋がり、国際社会に対し、援助を求めることが出来るのです。

また、この条約は、**途上国**にも、**先進国**にも、メリットがあるものと言えます。まず、途上国におい

ては、周辺国での国内避難民の発生や、流入に関する懸念。更に、先進国においては、難民受け入れによる治安の悪化や、あるいは支援の莫大な費用。これらが、国内避難民の支援活動によって、解消されるのです。

次に、2点目の、NGO団体を実行主体とした、支援体制の確立について。

この政策で最も重要なのは、NGO団体を、現地での支援活動の実行主体とすることです。また、その際、国連内に、国内避難民の専門機関を設置し、情報や資金等の管理を一元化します。

これによって、国連の支援体制の問題点を、すべて解消することが出来るのです。

まず、支援範囲を国連機関が明示した上で、NGO団体の中から参加を募る形をとります。そのため、NGO団体の独自性は担保されることになり、一方で、国連機関の煩雑な調整活動は大幅に簡略化されるでしょう。

また、NGO団体が、現地コミュニティとの調整を得意としている点は、非常に有用となります。これにより、国連機関の看板が、国内避難民の支援活動を阻害することはなくなるのです。事実、アフガニスタンで国内避難民の支援を行っているNGO団体が、現地での調整活動により、約1万人もの国内避難民の避難場所確保に成功しています。一方で、NGO団体はその性質ゆえに、資金面や情報面等において、行動が狭く、また非効率的になってしまうのです。

だからこそ、国連とNGO団体、互いの利点を活かすことの出来る本政策は、**非常に有効**であると言えます。

支援資金の拡充と、支援体制の確立。これらによって、難民の人々は、生きたい、学びたい、といった希望を叶えることが出来るのです。

冒頭の、あの真っ黒な絵のように、「絶望」に彩られてしまった絵は、もう色彩を取り戻すことはないのでしょうか。

いいえ、そんなことはありません。あってはなりません。

溢れんばかりの色彩が一枚の紙を満たし、彼らの心を満たす。「希望」が、子供たちの絵を、彩らなければならないのです。

救いはどこへ、求めるべきでしょうか。

救いはどこへ、向かうべきでしょうか。

そう、救いは、我々こそが、彼らへ向けなければならないのです！

ご清聴、ありがとうございました。